

文部科学大臣 萩生田光一 様
文化庁長官 宮田亮平 様

現在開催中のあいちトリエンナーレ文化庁助成金取り消しについて

厳重に抗議したいと思います。

この問題に対しての発言が菅官房長官によって端を発し、その後トリエンナーレ一部企画である「表現の不自由展 その後」へのガソリンを撒き、火を放つといった犯罪予告まで及ぼし、その犯罪を放置し而も、平和の少女像に対するヘイトも多く寄せられることを野放しにした結果この企画は中止に追い込まれています。菅官房長官の発言が非常に意図的にこの「表現の不自由展 その後」を指し、芸術が政治的であればいけない、というような内容を含んだ発言であったことの責任は大きいと思います。

芸術は本来一般市民の気づかない心の深淵に触れ、既存のものへの批判が原動力でなければ価値はないと捉えます。世界中のどの芸術を見てもその国の芸術発展と政治の成熟度には、批判精神によって担保されてきたことは明らかです。

私は在日コリアンとして日本に生まれ育ち、日本語しかしゃべれない普通の在日コリアン二世です。そして従軍慰安婦問題に関し、そのような事実はなかったと隠蔽する政策を日本が取っている、あるいはしっかりと謝罪せずに補償金だけ支払い、という全く理解できない政策が行われていることは知ってはいても、はっきり言ってこれまで私の関心事ではありませんでした。しかし、どうして現日本政府はこの慰安婦像を否定し、忌み嫌うのか、についてこの企画の中止がいきなり行われることによって、こういったことに対する一般の日本の中にある反応と少し違うものを持つようになってきて調べてみるに、中曽根康弘前首相がアジア太平洋戦争に赴き、軍事としてこの慰安所を作ったのが始まりということを知りました。日本軍とともに慰安婦所を連れ回し、アジアの少女たちを慰安婦にしていたということを日本の現在のみならず今後の未来に対して反省するどころか、隠蔽しながら再び同じことをやる目論見をしっかりと現政権は持っている、ということが菅官房長官の異例の声明記者会見ではっきりとわかったのです。

この事実への気づきは、体の芯から震えを感じ、看過することはできないことだと気づきました。

これからの時代、侵略することで何かを得られるような単純な世界ではありません。やったことは必ず自国民に返ってくる。ある意味、国境や偏狭な国家意識では人類全体が立ち行かない時代に突入していきます。

もっと広い視野で芸術を深く、広く枝を張り、根を張れるような、そんな深い政策を望んでやみません。

即効、助成金の交付を当初の決定に戻し、打ち切りの撤回を求めます。

金満里

2019年10月7日